

史料にみる **歴史**

新出の聚楽第行幸図屏風について

上越市個人所蔵 上越市立総合博物館寄託

天正14（1586）年の2月ころから関白豊臣秀吉は、平安京の大内裏が荒廃した跡であった内野の地に壮大な城を建造し始めた。秀吉の当時と現在の内裏は同じ位置にあるが、室町時代以前はずっと西の方にあった。つまり、秀吉が建てたこの城の場所がもとの内裏の地であったということが重要である。

主君の織田信長を謀殺した明智光秀を滅ぼして天下を掌握した秀吉にとって、4年のちのことだった。

はじめは「内野御構」と呼ばれていたこの城が「聚楽第」と称されるようになるのに時間はかからなかったが、やはり「第（邸）」とは名ばかりというほかに、3間の深さで20間の幅がある濠をもち、さらにはその濠の全長が1000間もあり、望楼形式を備えた天守があるというのだから、正確には「聚楽城」と名づけるのがふさわしい。

この年11月に秀吉は徳川家康を伴って工事を巡察した。あくる天正15年の正月には造営はほぼ終わっていたらしく、作庭工事が始まっていた。聚楽第が竣工したのは2月7日とされる。実は、この年に天皇の行幸を秀吉は計画していたようだが（『多聞院日記』天正15年2月3日条）、この天正15年中、秀吉は九州征伐に忙殺された。秀吉がようやく聚楽第に移徙したのは、同年9月のことである。

後陽成天皇が踐祚したのは天正14年の11月。

後陽成天皇による聚楽第への行幸が実施されたのは、天正16年の4月14日のことである。『聚楽第行幸記』によれば、秀吉は天皇の臣下への行幸の実態を京都奉行の前田玄以に命じて古記録を調査させた。その結果、足利幕府の時代を通じてもたった2回しかなかった行幸、つまり応永15（1408）年3月の後小松天皇による義満の北山第と、永享9（1437）年10月の後花園天皇の室町第への行幸の2回とも、将軍はいずれも自邸において天皇を迎えたという事実を確認したうえで、秀吉は新たな行動に出る。

後陽成天皇が聚楽第へと出発する。『言経卿記』では、「(天皇が)聚楽亭へ行幸有之」とするものの、次いで「先殿下御迎ニ被参了」と書いている。天皇が行幸に出発するのを秀吉がまずそのお迎えに行つたというのである。『聚楽第行幸記』につけば「其日になりぬれば、殿下とく参り給て」とあるごとく、やはり天皇の出発前に御所に参内したばかりか、その天皇の「御裾を取給ふ」と記している。要するに、後陽成天皇の聚楽第行幸にあたり、足利將軍家の前例を意図的に崩し、天皇の出発前に御所に参内したばかりではなく、天皇が鳳輦に乗るために階段をお降りになるときにその御裾をもってさしあげたのだ。そのすがたは、まさしく天皇の“家族”としての自分を演出するものだった。

天皇の聚楽第滞在は予定を過ぎて5日間に及んだ。家康をはじめとする諸大名、諸貴族もここに参じ、秀吉の権勢は聚楽第の壮観とともに印象づけられた。

ところがこの聚楽第の命は思いのほか短い。秀吉がその後継者として関白位とともに聚楽第も譲

った秀次に、秀吉の世子・秀頼の誕生もあったため、謀反の疑いが生まれた。文禄4（1595）年、秀次は幽閉された高野山で自害を命じられ、聚楽第自体も破却された。つまり、聚楽第は、10年足らず存在したにすぎなかったのである。

そのためもあって、秀吉の人生の最高潮を彩る聚楽第を描いた絵画作品はほとんど遺っていない。聚楽第図といえば、これまで三井記念美術館と堺市博物館の屏風が挙げられるのが通例である。前者は6曲1隻で聚楽第は詳しく描かれるが行幸の様子は見えず、後者は2曲1双と狭い部分しか残存せず、天皇の鳳輦は城内にすでに到達している。

2008年に発見されたこの屏風は6曲1双という屏風として完全なかたちを遺存させるばかりか、左隻では聚楽第を出て下長者通を御所へ向かう桐紋のある大きな牛車が描かれ、右隻には御所を出てすぐに北進して正親町通を聚楽第へと進む天皇の鳳輦が配される。この屏風は、まさしく天正16年4月14日の後陽成天皇による豊臣秀吉の聚楽第への行幸を、右隻の行幸図とともに左隻の秀吉のそれに先立つ参内を完全に描いた唯一の作例ということになる。

聚楽第行幸が秀吉の生涯を華麗に彩る一大ページメントなのにも関わらず、これまでさほど印象的な歴史叙述がなされなかったのは、ひとえにそれを十全に描いた絵画作品がなかったからにほかならない。この屏風の出現で今後は変わってゆくだろう。

現時点で検証は終えていないが、画家としては狩野派や土佐派ではなく、長谷川派に属する画家を想定している。

（同志社大学文化情報学部教授 狩野博幸）